



特 別
U5
6114
4



明 5
6114
卷 4

真書



昭和六年
三月三日
山田村吉六
長尾友太郎
代寄贈

一 慶長三年戊午ヨリ秀吉卿伏見之陣

二 於テ御持病氣同六月十六日一復

伏見中騒動ス 御康公御家老中之凡

井伊兵部直政中多中務忠勝水野和

泉舟忠重柳宗武部之輔康政等藤之

康二屋敷有之此時ハ兵部少輔伏見三

家康公秀忠公ハ掛著茲方ハ右象家

カリノ必夕ト申上ル家康公休ニ何方ノ
屋敷ヨリ騷キ立タル其様ヲ見カシ候
ヘト仰セツテラハト云

一 同八月十八日秀吉御地界隠密ニテ
御炊火事ノ由ト計リ申ヌニツキ
家康公モ御見テイノ夕メ伏見之御殿へ
所ノ處ニ右田治部少輔ニ成方ヨリハ
十嶋ト云者ヲ使トシテ秀吉々御地界

參リ隠密ノ御被合ソレヨリ伏見中雜
執アリト云

一 同廿一日ヨリ加賀大和云并奉込元ヨリ御
使トシテ元吉老生の推示發等御屋敷ニ
イリテ周御地界以後數月ヲ^不經ニ御縁
邊人取組御我^レノヨ^リニ^テ出申上候也
一 奉込元ヨリ大津女御正系福海丸清洲右支
正則蜂須賀所成也家政未へ使アリテ^テ趣ハ

台へ相送ニヨレナリノ家康ト縁邊ノトリ
組御送ヲ比月キ不存ノ由ナリ正家返
答ニ存寄ナキ儀ナリ家康ト申堺之
町人此方覺仕候ト申ナリ其後家康ヲ奉
込名へ呼ル由ナリ福海返答ニ峰頂賣所
与家康公縁邊ノ依江仕候也家康公少三思
石寄ナキ候ニ候我ホハ右閣御礼ノ端ニテ候
間家康公ト縁ヘントリ組下指御意ヲ得ク

ノヨク竊ニ申上ニ候テ去ヨリ御帰リナリ
隠密之儀ニ依ヘトモ後野江正長及ハ若別
右御懸意ハ右寄可申及ニ此部由輔ヨ
申小申然ハ依懸志ト正思右依

- 一 八月十九日秀忠御内事へ御下向
- 一 慶長四年己亥正月十日大岡御遺言
秀頼御大坂ノ城へ御座御座大知言
利家其外大石小石御供 家康公モ

大坂へ御遊幸片桐平正より御着三丁中
一日御逗留十二日三伏見へ御歸り平瀨宮
より御馬より早道三石伏見へ御着後へ申し
刻二御着

一 家康公同十九日ノ昼ヨリ有馬法平所へ
御座十寸レ乱舞十ト在作自二レト御座
被成山又ニ晚ニ并伊兵部ト示御閑談其
後早ニ御歸在後山ノ藤堂伏後舟高麗

秀頼卿ヲ於此中書法平間敷以る以依可死
ト存中本ト申上レ由

一 右之儀ニ有る諸大名之屋形、思、以難山
家康公へ池田之儀明尉輝政一類福徳
丸清門之捕黒田如水同甲斐守長政及書
伏見子高直及右近忠政有馬法平則
頼金森法平藏也有樂長三新居駿
河守一版介由身十九元ノ毎夜結二人共振

大古利部少輔吉繼、家康云へトリ掛
之何時モ先手ヲ仕奉りトモト一戦可
仕、由三ノ空力屋敷ニ人殺集メ、此在依
此河分年寄、家康云、お賈大御言利家、
安藝中紀云、輝元伯耆中御言秀家會
津中紀云、景晴以上五人、奉り、德善院
淡野彈正女彌長及增田右衛門尉長盛、
長束大統之捕正家石田治部少輔、安中

老ハ生駒雅樂頭中村成高、少捕一氏、皆
尾帶刀右清以上三人也

一 奉り、元ヨリ使ヲ進、以後伯耆中紀言秀家
如、大倉等合戦合終ツテ、退ガ之、石武基
ニ於テ石田治部少輔申、此ハ吾亦人殺早ク
亦、申、由、ト、云、又、三増田右衛門尉、石治部、ハ
是亦ト、大、本、之、儀、ヲ、詳、思、ニ、仕、中、本、之、儀、
辨、ハ、一、終、合、可、相、反、之、由、申、ニ、修、其、夜、取

御中平延三十九

一 愚問甲斐守の長政情おのの敷又名之口味方

二 後記多之

一 柳生但馬守子息又右衛門ヲ使三三テ合戦

三 三ノ成力何三テ事ト下進左近方遣之テ六

今之代ニ松永マ明智カ極上者ハ十キツト

申ス但之ヲ聞テ取掛ル程ノ大將カ在關敷

ト申

一 正月未番督ハ御譜代元祿系武部ヲ捕為

組頭上洛熱田ニ於テ右之趣ヲ聞旨直事

伏見被掛有乳髪ノ辨ニテ直^直御前合

本之介御機嫌ニテ御不ツカラ御厨計

ヲ被下其介御勘定ヲ可成内聞之間代

官共ハ是事多依洛与云信ヲ罷止旨依仰

伊奈熊威忠政久保十兵衛長谷川七郎

次官等罷止ル處ニ路次ニテハ是ヲ聞一騎

カケニ伏見へ下り大津山階醍醐花台道関
東之人牧川モキウナ付上之方懸敷本

一 本多作左兵衛宗直罷官今乃入之

旅子正仁聞此時後野郎正必何ト申上
今程ハ不通之由御意ヲ表リ其ヨリ御心
所へ参リ對面之時 家康公へ折、御座也
ト申ス今ハ一寸ハお人お事察杯ハお入不仕
ヨリ申ケル伏後也申ハハ禮ノ御恨ニ御座ニ

被作也ト問其儀十ト衣申御直ニ御聞
十キ一年来之御入魂ヲ御失念カト申又
ナラハ御供可申ト伏後也同道ニテ
家康公へ何ニ仕リケ由ヲ申ナリ

家康公作ニ其身云實ニ迷惑之時御
或約ニテ其方屋敷迄御座之儀忘
候ハ大間御地敷之時ナリ固ニ七十キ留
在部少將八十海ヲ御使トニテ此本ヲ卷

所不九所所儀御云用之由申越其
方、自比人好之故一入遺恨被恩百人有
仰、將、彈、正、申、此、人、後、子、不、存、面、月、十
キ、由、三、丁、落、後、取、返、之、由、十、リ

一、慙、而、不、圖、御、遺、言、三、年、寄、奉、以、衆、其、不
お、入、有、之、時、八、生、馬、雅、示、頭、中、村、或、部、少、輔
坊、虎、常、力、扱、ラ、イ、夕、之、下、三、丁、本、洪、申、儀、二
之、相、海、ス、ヘ、キ、ノ、由、御、仕、置、二、係、一、坊、虎

常、力、儀、ハ、子、息、信、濃、守、二、秀、忠、知、御、目
ヲ、掛、ラ、シ、常、力、ハ、家、康、公、之、別、之、御、懸、意
故、并、保、兵、部、少、輔、ヲ、以、御、扱、之、様、子、之、以、
得、御、意、備、公、儀、三、丁、八、雅、示、以、或、部、少、輔
常、力、之、人、三、丁、扱、ヲ、致、シ、家、康、公、御、利
達、之、様、子、相、調、二、月、五、日、之、由、御、折、言、紙
相、海、家、康、公、係、作、有、方、之、御、折、言、紙
常、力、ア、ツ、カ、リ、重、十、リ

二月廿九日加賀大納言殿病中三たびヨリ
家康公へ御見舞三御上り家康公小舟
三御連三御お召出利家先御座敷へ御
入体是れ御お召様ニト江作小處ニ立三可宗
ヨシ然る家康公先御歸リ被成御座敷
下三三船ヨリラリ荷物三三江公宗小藤至
計長岡越中淺野左京宗揚之殿ヲ並
引三三同道也大納言及并右羽織ヲ至

ラレ候家康公ノ小姓氣ハ長袴家康公大納言
殿同座三三御相伴之介雖アラニ御座候
様ニ尋申小御座之付大納言及神官信濃
ト申者石右方御杯下寸レ至計頭越中
お大京を更之介次之座敷三三御振下
ノ所大納言家康公へ江作小御座敷道ハ
夕三三候故撞ノ儀申候間白濁へ御
後リ候テ可然之由ニ御座敷申上下

又曰云及うホメ申候伏見ニテ家康公法
尾敷ニ御座候時トリ掛可申口存テ徳
善院節ノ御座候ニテ御座候大納言及
へ節ノ御座候被申上大納言及向為へ御
核リ不然ト云候伏見之徳善院當由
之河御移リ被成候此中一節ノ所要十
ニ時之御奉公ト御座候成山御座之誓
紙可江下ト云候御座候節ノ御座候被申上

御名代ニ并任兵部折右紙江下候也

一 家康公大納言殿ト御入龜之儀初大納言
利長長岡越中守被申奉込之者共
家康ヲタラシメ大納言殿願テ死去十二ハ
肥後守ヲタラシメ候ニ中間トリ申間敷ハ
如斯ノ様子ト見下兎角 家康公へ頼重
入龜被成之礼大納言殿ニテモ可成之由江申
礼奉成合点ニテお及之計願テ計加へ又其

後後野左系ヲ引入此續合相調候ヲ出
ノ様子之由後申候十リ

右一箇月後二向馬へ被成御座候節奉引
礼刺取交之舞三ノ豊後橋ツメノ罷出
テリノ由十リ

一 三月十一日大和言殿御見舞 家康公
大坂へ被成御座也三ノ大和言殿屋敷へ出
候候大和言殿重ノ御座也三

家康公御見舞ヲ不火飛忝ノ被存御座
ヨリ礼寄合候處へ石田治部少輔へ三テツ
三ノ与風參候故人ノ仰天ノ由也其晩ハ
藤堂佐清守中進屋敷へ御着也候

一 其夜治部女掃一組之者トモ進ノ上果
様子見へ山ノ家康公へ取掛度由三テ小西
治清也屋敷ニ寄合申之由家康公
ハ行方藤堂佐清也屋敷ニ罷出

此時御方之元池田之盛福為友六細
川、越中舟黑田甲斐与播磨信濃与
加波北後与寸介矢念イ夕之假

一 其夜藤堂作所与屋舖三丁有馬法印
金表法不織田有示山岡道阿弥岡紅智
等之故在候處淺野彈正徳山兵衛系系假
丁亦賣大納之友不相甚肥之系与ヲ御取
之取下此標二九標三毛御座之御掛言法比

下之程以忝可存首被申上候仰三折置候
ヲ取候比八又卜二毛由毛御如在系間敷候
就上毛人之存心為毛山百九ノ儀十リ伏見ヲ
引取程山丁御越可取之由又申上候ハ
大細言及存命之口三身申度由上同着
曉二丁御座候有馬法印ノ声一三テ

家康公被仰候事二慮言云御座候伏見
三丁可取候ト取作山ヲ疑ハレ之從取程

候テモイカト可記存小間伏見三丁モ云用十
ト被申小共後必何相違ニ申候哉願テ
還方位小翌日伏見へ還御先柙系或新
御跡井伴云部十リ

一 向海之御家少と有来三月十九日御後
リ長女小向海之御屋敷ト有方ニ長女御屋敷
一 閏二月之日か賀久約言死去其後石田
治部少輔ヲ可打殺トテカノ後ニ討取

清臣長岡越中守忠貞後野丸京土更茂
甲 長福為丸衛門正則黒田兼弁長政共介
大右元ニトツニ成大坂本之介堅ノ治部少
輔我屋敷ニ籠ル依竹義定伏見ヨリ其系
人殺ラ素口ニ至斗治部屋敷へ系被合
白治部依竹ト同道ニテ甘藷揚ニテ浮田
中納言被テ指候係系為へ系リ秀家
ヨリ家老ヲ添依竹ト伏見へ被り系被

大右元遊掛伏見三丁可討殺卜家康公被
作上候處ニ在り多依流申上六治部少輔
儀音申可上候ニ討果之大右衆 三

有御所候哉卜申候得八家康公御心ニ叶
今度ハ御扱被成候卜テ壬午二月七日治部
少輔依和山へ被遣山之所与様勢田迄在り
連候被地ヨリ御歸成候今度之御恩奉
ヨシ之成申由ラ下ノ御屋敷へ直ニ御所成

候テ被作上此所之所与様御供ニテ節
元ヨリ振替ニテ治部節ヲ呼半時計
リ何本ヤリシ申候

一 向湯へ御移リ十寸シテヨリ御成光殊傍
リ毛利治津景晴依作之介縁引ニテ被
系毎回大右元御禮ニ化參山也

一 伏見之御所候テ拵申モ云用心ニ山間
家康公ニ後ラセラレテ然卜生約推示願

中村武部少輔播磨守等元之奉引元
申旨申可儿三付至二月十二日御後リ
被成山右守刀御内證江申上徳善院貴
番之古伏元へ御後リ流山住善院六言
早族以奉引元三之奉御後十リハ

一 豊國^{トヨクニ}建立三六春綱^ニ月十八日家康公御社系
之介^ト流元右元次身ヲ遊テ社系家康公ハ
照光院殿ニ流成御座山天台流成御座山

本之介長所諸人退居申候

一 石田治部少輔ヲ打殺候ハ二ト在候不相
叶トテ諸大名之者入其系ヨリノ意ノキ申
横山御邊申久所國ハ元之奉引元利長
三月廿八日天坂ヲ立テ身へ被レ奉候

一 同其日付衆高顯慶ニテ々々本山テ伏見
御城於御系對決一之ハ所中任官等元
中^ト兵部一之ハ治部少輔智福系右馬助

大田飛源守其兄和泉守熊吉内統元世より
ケニテリ候テ御政務徳吉院法野源正増
田吉衛門大率大内統聞ニテ十リ

一 九鬼大隅守喜隆公本指葉統人在所ヨリ
材木薪十トカ候大隅守知以不ハ川流ニ
イ夕之候間其運上テ大隅守取来候大
内御化家之節ヨリカ不申小三月下ニテ
扱半分程カ候様ニト申候大隅守聞候

ハテ奉込元公本ニカ候故奉込元江申候志
大内ノ御置月破レ候由家康公ハ江申上
候處ニ仰ニ百姓町人々苦勞ヲ御考候
字治位ノ運上御止被成候執列ハ是國
故未其由法云御座内御化界候間カ
候得共云用トモ了間ニ不及之由作之故
統人ハ忝カリ大隅守ハ御恨ニ存候由
一 家康公重傷之御祝儀之夕大坂ハ九月

六月七日此二被成御座候處三増田右衛門
長来大統系リ申候ハ大坂三テノ談合ニ
家康公御登極之儀野彈正御連ニテ
御年ヲ取付大野修理云方河内与吉人
ニテ可奉討ト口被相窮此儀肥前与
企三テ候間其御心得云云候得ト竊ニ申
言リ其羽立日晚ニ右衛門所へ被成御座
處ニ御談合アリテ還御云云又大統右

衛門刑部御見舞ニ參御談合アリシ
トト聞ユル也其内替リ夕儀モ在ケルカ
重傷之御禮ニ御登極被成御座候ノ衆モ
大勢奥迄ニイリ候故櫻ノ門三テ皆、成
リ候ト在仰遣候トモ不構示御座候
三テ云云御座候云云御母云ノ次ノ間
迄小姓衆年寄元三テ參申候
一 伏見之御座ニ云河内与吉御留守

治御座候故御寮書上御使卜之
秀康卿八伏見御座候御座候
早之天板可之系之由三月一騎力ケ二十日之
未明ニ系候

一 九月十日治部少輔屋補ヨリ五五敷命
核リ被成候

一 大野修理云方河内ヲ八常陸へ御流之候
彈正八甲列知事不へ被遣候由處ニ秀忠公ヨリ

竹尾忠兵衛御使卜之甲列へ在遣候

家康公御機嫌愈々候上ニ秀忠卿へ八戸

へ可遣旨就仰甲列ヨリ武藏前中迄伺

公也上候今度竹尾忠兵衛被下御

懸之上意忝奉存候卜申秀忠卿

御座候少体足仕候御座候御座候

間七八日御座候御座候御座候

久久保十兵衛尉御座候御座候御座候

權、馳之之門、三家康公、一彈正、一人、一名、
寄之、一椅子、一御、一窺、一之、一候、一處、一不、一若、一此、一本、一二、一被、
目、一右、一候、一向、一早、一、一御、一對、一面、一可、一也、一候、一作、一遣、一六、一寸、
以、一三、一ツ、一キ、一則、一彈、一正、一儀、一御、一前、一、一右、一方、一御、一目、一見、一仕、
其、一後、一甲、一列、一、一御、一七、一ト、一、一之、一候、一候、

一、一大、一板、一西、一之、一丸、一、一御、一後、一被、一成、一候、一得、一ト、一、一増、一田、一右、一馬、
長、一束、一大、一花、一十、一ト、一取、一持、一三、一、一西、一之、一丸、一大、一廣、一間、一天、
一子、一ヲ、一立、一進、一上、一、一右、一方、一候、一明、一之、一年、一、一正、一月、一八、一香、

賴、一紳、一、一諸、一大、一名、一衆、一御、一目、一見、一元、一日、一ヨ、一リ、一五、一日、一、
テ、一御、一禮、一衣、一申、一候、一、一則、一秀、一賴、一紳、一ト、一同、一儀、一法、
西、一之、一丸、一大、一廣、一間、一三、一、一御、一禮、一被、一申、一上、一候、

一、一加、一身、一陳、一之、一用、一意、一專、一有、一之、一、一右、一方、一羽、一衣、一衣、一儀、一請、
長、一重、一加、一列、一小、一松、一、一罷、一在、一間、一御、一先、一子、一可、一仕、一由、一、
テ、一右、一方、一新、一門、一ヲ、一西、一之、一丸、一、一右、一方、一候、一、一右、一方、一光、一ノ、一御、
服、一指、一ヲ、一被、一下、一候、

一、一是、一由、一左、一近、一ヲ、一御、一使、一十、一、一、一右、一方、一初、一山、一、一右、一方、一是、

此師傳之治部亦存假由三三誓旨然之
元申上假元近三國光ノ御版指之方也
一十月比日運系久傳之仙本ニ方假ニ方假
又寺卜方假寺卜己ルニ傳テ公本ニ成久坂
西之丸ニ終テ奉仍氣開才三テ太閣ノ御
追膳ニ方假ハ又本曲奉ニ假間下流肯御寸
八半五成小本

一 極月初榜列於木ノ御鷹馬野ニ御被成小

被地御座假門川尾肥系舟外官所故御地
走申假仇之漢路与場由若狭守其介也
閣之御雁鳥通衆御依和冬御由元ニ繼由
有示細川幽林有馬法印金委法平青木
法平道阿弥知曾半入教冬御ニ坐假
一 大旨刑部不淡忠之申上ニ本御談各
申夕元者也元時浮回法知言家申ニ争
論方元假ヲ大旨刑部所其大故林ノ尔

或部ヲ以テ加へ被假得トモト被レ候ニテ
此後与海田た京園越不苑房志ニ与不
討年未リ之切テ亦假時相印ノ夕皆坊
至二十之申之由家康公被聞右式部ヲ御
之カリ云々假平名生計十ト末リ候ヲ何
トテクダリ公テ海田ノ家中之儀不入取持
哉左様ニ欲深ク物ヲ示シカリ申者トハ想
右レス之由御意ニ自式部迄ヲ聞マセ侍

北軍ニ暇乞モテ早ニ罷下リ候刑部乞ラ
聞テ式部ヲ御之カリ候ハ我モ内系ナリト
テ賤シ之假ト也

一 長尾景虎上ニ間敷有冬時分ヨリ其由治
御座候テ春之此係系与書ラ會津へ被
遣候處ニ上ニ向敷由治是ニ故ト下景
勝返治ノ御由治ナリ

右之ニテノハ懸聞書也

會津御役所

一 大平白川春家康公山道三子依竹義直御
信史三子入清宰相正系八木次三子入羽出羽
義光越後津川三子入羽柴肥前吉利德元年
羽柴久冬命相隨入筆三坊皆揚父子溝
口伯嚅守父子村上周防与父子右七月廿二日
大平搦平一度可入御陸觸卜之

一 六月十六日家康公御立伏見一日御返

春日石部其晚味長乘大統父子水口
系上仕父子御腰物被下其月代刻二
風石部御立石女関ノ地統三御泊り春日
四月平吏ヨリ御立石之列化ノ海ニ終テ
田中兵部御腰被上吏ヨリ石次在御
濱松之城三ノ堀尻信濃御腰上ノ平ノ
御儀可仕ト越前前中ヨリノ系平御用
此部康公御意治部也補仕形也

根間作和山ノ様子ヲ罷降ルニ立聞僅得
信濃ノ御供仕ハ下御意常ノハ歸レトテ
池程熟ニテ水野惣ニ新辰御振舞名女
加賀野井彌八系高惣兵衛ヲ切申伏ヲ
帯刀ハ誅ハテ眼指ニテツキフセ源平負申
候家康云中泉ニ御治リ次ノ日中ハニテ
昼之御膳山ノ對馬守兵上鴻田御治リ
次ノ日讀有ニテ丸ニテ中村武部少輔家老

横田門膳所ニテ御膳被石上候後有御著
日ハ鎌子ヨリ先ハ人殺未聞敷有御觸小
テ人殺トテリ申候御膳モ道テヨリ或部
為竹籠ニ乗申ニテ御氣ハ參候ニ物射ヲ
御覽被成忝御意トモニテ或部海ヲ流
之新ニ被申候計リニテ古門モトヲ又
候次ノ日儀魁力関御治リ次ノ日治津治
治リ也有冬依海島久保相模守御

迎之东儿七月二日早入御着ナニ延ラレ
相列鎌倉御立寄一日御逗留不殘御
見物其日令伏御泊リ翌日早御总
被成之由也

一 伏見城責衆筑紫中納言海津兵庫元
利家之人相増由右清州人相長奉大内親
人相弓之者鉄炮ノ者トモナリ

一 七月十九日大坂西之丸留守兵衆押立伏見
へ相籠ルニ有懸元則西ノ丸後リ玉ヲ

一 七月廿日大津宰相高次へ人質方候得ト有之
候得共関東へ一味故云来引志キ大津へ人
相ヲ寄ラシ候由柳川侍従橘左近任藤
民部筑公系上野南條中務本下内中留
兵部石川掃部高田小次命弓鉄炮ノ衆大
津之故九月十日退散ナリ海平ヨリ大鉄
炮ヲ以責ルト云

一 七月廿日任勢へ入致しおそく侍従安國寺
長曾我部玄佐と長宗久統勢列お野津
ノ富田信濃と構へ取寄と多し攻候て逆ふ
一 七月廿一日松坂之城古田兵部少輔平勢千
二百人籠り候て鎧為信濃守人致押寄
ルナリ

一 勢列岩手ノ城猶葉病人手勢九百六拾
人猶籠ルナリ九鬼大隅守田口迄責掛

候得共堅固ニ持故引逆大隅ハ此列候て誅
セリ此由此介と方元ノ抱立城々水只長東
仔賣龜山公園本下野守神部八羽本
下總幸名氏家内膳海上九鬼大隅守
尾州之州浦ヲ焼拂フト

一 今尾ノ城ニ橋下總守付表ニ高木市
兵衛多勢ニテ右城ナリ

一 大垣ノ城ニ石田治部少輔小幡清為守家

中約言遠津兵庫相之長兵衛高橋九郎
周主膳秋月之命然首の統元地見和泉
川尻備前福原右馬也本村左衛門傳統
都合貳万貳千六百人

一 濃州波阜城二波阜中約言未だ信卿

一 瑞龍寺山取也二ツ三三成家自程京立及信

門天子平執千計リ猶龍

一 尾州大山ノ城ニ右川伯也也加勢ニ橋葉

右京高同夫六加藤九衛門園長門守大板ノ
弓銃炮氣都合七千七百余人

一 小園押へ加賀越前ノ境目大聖寺山ヲ

拵へ山口玄蕃子息右京ヲ入主也八月三日

築北家也山田心ヲ打之又聖寺へ取掛惣ノ

搦へヲ打破リ町口迄乘入テ右父子廿九ヲ

相抱テ今上ノ廟ニ戦フトイ共不相付云

番父子右京成田左衛門の亮也其衆ヲ初

トトシテ未ノ刻迄ニ六百餘騎討死スト云
紀前書得勝利ト云

一 七月廿五日羽林北条等志州小山之旗ヲ
打立在國之平ニ逢タル人殺ラガシ湊川
子トリ川ヲ打越山田ニ陣取ト云

一 丹後國長岡玄書構田郡真邊ノ旗ヲ
小野本縫及右大將トシテ相馬丹波ノ
小野元ヲ催シヨリ押詰ル九月十二日ニ

旗衆逐散ト云

一 七月廿一日ハ大臣家康公江戸御お馬ニテモ
夜程首ニ御泊リ其一日前ヨリ上ニ静
十ヲサレ由風聞廿二日若自廿二日右川世官
小山ヶ所へ艦十以上方脱申来リ其後迄
指ノ齒ヲ引カカク任進ニ自秀忠郷守津
宮ノ御着陣ハ右佐を候故御見平ノ大者
小山ニ集ク由上ヨリ大者元ハ殘御振舞

十寸レ真之御座敷ヨリ道阿弥知智御座
三ノ被仰候ハ先景勝ヲ御誅伐可成候
哉上之御返治可成候マト御為十寸レ
息ニ福海丸衛門右史黒田甲斐守徳永法
印何モ上之御返治可然旨死申候ニ付テ大
名衆追御先へ御上セ十寸レトナリ

一 倉津ハ結城宰相秀房郷教ハ斷ニテ寸レ
白ラレヨシナリ

一 秀忠郷ハ宇津至御普請御仕舞可成事有
路ヨリ御上リ候様ニ下被作家康公小山ニ
十日御逗留江戸へ還御之由船橋切候故
葛西ヨリ御登リ之由ナリ

一 真田安房守近ハ企上野太伏ノ所ヨリ引
返信州小懸郡任勢湯ノ故ニ指籠ノヨシ
上聞ニ達シ急キ討之スヘキ由ニテ秀忠之御意
發御供ノ気毒石近ヲ捕去回任臣与千石

越前守神原或部久保相模守酒井忠兵衛
日根野筑後石川玄蕃中多作俊与都合之
百八の子石騎押寄中丸一ノ木戸迄責中り
不付降レ来也同好衣思ふ所御赦免ニテ出寄
与息ま由丸右清剛仇罵云ニテ高野へ引籠
十リ秀忠郷ハ本曾路ヨリ都へ御登リ也
一 上より又右衆ハ小山ヨリ御先へ被力上福鴻忠彦
被申上御目付ニ井伴兵部中由中務上セ

レハ八月朔日ニ江戸ヲ立八月十日清次ニ召條

又ト云

一 上より又右元清次ニ相集ル家康公ノ御書馬
相待俣屋ニ村越茂也ヲ御使トシテ御上セ
十ナリ道ニテ兵部中務ニ達申俣何ナリ御使
ニ系俣ト相考ナリ清次之諸大名名ニ参リ
俣ト申御意之旨ハ何モ其ニ被テ拵若等ニ
云田右俣同クハニテ夕ニテモ被跣之ニ御感ニ

可江恩石候若仕換ニ候トモ後日ノ合戦
マス存候へ時日ヲ移す久御お馬下有トナリ
井伴兵部中務イマ其儀ハ被申間敷
候何モ乞ニ被テ指苦方ニ思召ハトナリ
江申候其儀ハ言ハ我亦相為申由言上致
ス下申ナリ清次へ系リを候下申ト存
内ニ成物存候ハ思召系ハ列ト云者ガ武士
者ノ入本ニラ拙者不定ニナリ候共御意

ノ様ニ申トゾシ諸大名衆へ御意之趣
リノ終ニ申候處ニ福清丸清門ニ更ガ
丸馬物黒田甲斐守山内對馬守一門ニ此
合点被參本内月之由福清江申候早
速波阜へ取カテ下申トナリ

一 加賀國小松之旗至羽立帝丸清門長室名
田沼部女捕三成ト一味シテ我ニ指城ニ指籠同
國大聖寺ノ旗至山内之意也此ニ又同國合

ノ城之^北前有利長家康之味方十^九カ方
五年九月三日逃去表へ勸キおう^レ之田山ニカ
キアケテヲ拵へ岡崎内中ト云傳ヲ右斷計リ
ニテ指置借又路次中ノ敵旗大旗責落之上
ニトノ評送ニテ并立利長何トカ思^レ之^レ小松
ノ城ヲハ不攻ニテ小松ヨリ五里足^レ大聖寺ニ
城へ押寄八月三日ニ被城ヲ攻落^レ又金反方
富田義人討死先年ハ細谷本邊迄討^レ新

表へ可働息^ニ中川守伴謀狀ニテ利長息引
入御寺城ニ小松之城ヲ押へ^レ勢ニ千餘騎ト
之置小松ヨリ上道ニ里程合^レ方ニ三四
山東江ト云^レアリ被^レ息邊ニ利長陣ヲ拵へ^レ
此後又小松ノ押勢ハ千餘ヨリノ指置ニ但セ御寺
城ヲ引^レ百ニトス然^レ息邊ニ九月八日ノ未明ト拵
又兵衛ト云^レ足^レ難大^レ物^レ身^レ邊^レ之^レ小松方
ヨリ忍^レ者^レ方^レ置^レ喰^レトメサセ^レ故^レニ小松方

城ト御幸城ノ向ニテ小迫合始所ニ敵味未
ヨリ一人ニ掛合カント云ハノ邊ニテ敵味方ハ
合戦ニ然ルニ小松方ハ宵ヨリ竊ニ舟ニ
ノセ伏兵ヲ忍ハセケルカ味方ノ相圖ニ任セ舟
ヨリ上リ切掛リケル故合戦方敗軍ナリ
其ヨリ小松ノ城ノ兵城ヲサニテ引入其後和
長元寺津へ引返トテニシメクナ津へ引上
ニ其道ニ筋アリ一筋ハ小松邊一筋ハ津井

纒平ナリ依又小松へカニラスニテ引トラントスレハ
其間程遠シ老幼ノ者トモ概ハシケルハ津井ノ
方ヲ不通ニテ遠方ヲ通テ敵ニ恐レタル風情
タルハ其上敵ハヨモ城ヨリおルテアラシ唯城下
ヲ通ラント定ムル處ニ度ニ松平久兵衛トテ若侍
アリ未成ヨリ指方申ハ津井纒平ヲ引トル
事ハ事ナシハニ我ホコトキノ者城内ニ籠ルト
モ城ヘシテ敵ヲケタテ通ニナトカニ當リテナ

可有哉敵が凡二旬テハ伊予細道山正原田より
案内者ノ敵ゴカシユノ語リニ依兵ヲ置
通ニ時切テハ必敗軍スニト申シテハ推系
十ニ分別タテラ申者哉老兵ニ任セ重儀得ト
ソ云ケル久兵清敏ニ若者ノ云調法ヲ申古ク
リ玄十カラ今為敵ヨリ敵ガニテ必定セリ寸
アラニ終テハ我等一番ニ鎗ヲ可入ト廣言ニ
テソ取タリケル八月九月ノ刻ニ御幸塚ヲ

打立タリ法井籠キヲ通ルニ敵ノ竊ニシテ
不方合久兵清分別タテ違夕ニ様ニ申ケル備
小松ヨリ在町計リ打道有籠キ西方八原田也
道之廣サニ間計リアル所ヲ金以勢長ニ
ト通ルヲ敵之内緒キ押詰ニ討キ取合
以勢儀る敷見ヘタリ松平久兵清引返ニ後井
籠キ之具申ニテ鏖ヲ合スル井上勲兵衛若田傳
左馬水越縫殿右大野甚之介高橋左馬何毛川

近高名又兼田之清洲證文アリ備後井籠
ノ橋ヲ二三引越ソユニテ兵引タリ丹羽五
市郎一番鎧絆々流々討死ナリ不敵
本之兼子作之成田也九命之田兼
松村孫之部八引近之鉄ヲ合セ大将分留
之部有清ノ大島ハ沼井右清洲御軍場ノ部
沼井半ト云田組馬半也兼田之部言ハ
組ノ象ハ山崎長門高島南ノ坊右田組馬

長野九命九衛門ト云組御軍場ニ残レ也
田家中兼半清兵衛高名之同族也七命兼
鉄炮ニ當リテ死ス池田家頼政ハ九氣高
名在同家中毛利傳ハ矢ニ當リ死ス九月九
六日初入大將對面ナリカケ橋川寺井
海道之橋ノ上ニテ人質ヲトリ申ス筈ナリ
利長後井籠半之儀思ヒカセハ汗カイツ
ト衣申シトナリ久松平伯督守ナリ

今儿小松より二鎗合せしむ改回固成心物九郎合座
元三感状おれ小松衆の橋う此より押越し夕
故感状にお

一 卜堂ノ内勢州中流卜申所大神宮
御師小老籠ト之者数リ候ヲ摘棄病令
ムラトスナリ

一 丹波福智山小野本部城ヲ細川越中
之介近少之人名責取扱云々ナリ

家康公會津御追討之本

一 陰謀者會津之城之長尾中納言常晴郷道
之倉ト露頭スレ候テ可成進發トテ大將
軍三徳川内大臣源家康公副将軍三河守
中納言源秀忠公都合其勢立万餘騎廢
長五年六月十六日攝列大坂ヲ討立給フナリ
其右之朝敵平ヶトテ都ヲおれ將軍ハミツ
志アリト云今源氏ノ大將軍ヲコソハ志

白しけし其日之御お立イツニ後レノ聲花ニ
馬鞍鎧ら鑿鉄炮長ロニ至ル迄アツリヲ拂
フナリ金銀ヲ千リハメキヲメキ渡ツテ見
ヘシケリ御供ノ人、盡善シ盡美ス京堺ノ
者トモ平浪伏見ノ邊ニテ核發ヲ打テ物見
ノ貴賤巷ヲ争フ也然ニ再日ヲ驚カセリ
大將軍モ心ヨケニ見ヘシ玉ヲ相伴ノ者トモニ織
田有尔因河川也山右彈正金兼法印因書

山岡道所跡長岡越中舟池田之丸清洲尉同
備中寺有馬法平因玄善藤筒井伴重与
福清丸傳内之更全掃部以猪子刑部淡野丸
系之更德永法印同丸馬也藤堂依後与猪子
之内虫捕生馬譜波舟田中兵部与輔子息
民部蜂須賀長門舟墨田中斐子加号
丸馬也小方遠江舟中村或新女捕名外中村
長有清因尉山川對之舟堀尾常力因信濃与

一柳馬橋津田長門寺月小平次富田信濃寺古
田兵部少輔福業院人右田織部少輔一柳
下總寺九鬼長門寺寺子山相模寺龜井武
新寺寺以志摩寺石川玄蕃院田信實天野
因防寺與平藤兵衛尉川村也九清門尉家
寺内寺備作寺之河寺赤井寺八因田也集
門尉月羽勤也寺是寺九馬也西尾豐後寺
中村寺九清門尉之好内寺文清寺長寺

川是兵衛令校又田部之好新右清門尉舟
然立部九清門尉平野九清門尉比田倫後
寺子息次右清門尉依之流路寺平田若
狭寺落合新八毛利志兵清尉中村又流
能世惣九清門清水小公即松并平九清門
作乃久右清門尉同源六祖文以法寺終
本越中寺溝口源太郎坊田松八寺以紀
後寺清田九寺野間久右清門尉伴丹兵

庫別不孫高本由同備舟松倉豊後与
村越兵庫頭神保長之高秋田右近野見
彦右衛門仙石武部服部万系極樂後水
野河内与依之長兵衛山岡修理亮因由
水島高心立庵半九清門尉都合五万五千八百
騎六月十六日大坂ヲカ千里ノ東海ニ懸
ク或ハ野原ノ露ニ宿ヲカリ或ハ^高山ノ若ニ
後寢ヲ^三山ヲ越川ヲ渡リ日數経テ七

月二月ニ先陣氏統帥ノ著也玉ハ後陣ハ
駿河守伊豆ノ真道ニシテ支ヘケル

之成謀叛之入較大坂へ集ル

一 石田治部少輔之成謀叛ヲ企テ大坂率以
中大台刑部少輔吉継増田右清門尉長盛
長束大祐左衛門政比呂之寄合衆定メテ
此令度家康公奥列カ勢之儀ニ京晴カ
運活卜ハ云ナリテ其意ハ我威勢ノ程ヲ談

ミテ天下ヲ可相集トノ命ナルニ是君ノ為
ヲ思ハハ事フノ心ナリ信北軍互ニ中絶ニテ水ヲ
諫メ國ヲ靜ニシテ唯天下ノ云々ナリシコトヲ
思ハハ思長トハ申ニ年久敷治リテ靜也
之世ヲ今角駭動ヲ十ニ玉ヲユリノ本難キ心
得ト弁古ヲスニ申ケル先皇恩ノ國至茲
候ニ更ラ相觸テ七月十九日ニ大坂へ池集リ
テ御座公津儀スヘキ談合決ニテケリ先備ニ

ニ成カ時分ヲ伺ヒ世ヲ奪スヘキ智畧ナリトハ後
ニラ思ヒシラレタリ其人數ニ毛利右馬頭輝
元安藝藝元安郷吉川日統人彦家出國也
柳川竹從橋元近將造家茂鎬河佐濃也
五河大和也小西拾肆也新田平次治平高橋
至階有馬修理亮相良宮内少輔秋月也
守禮長高橋九郎出津兵三津頭茂弘守達氏
部久留米藤四郎秀色關長門守筑前守

初言秀秋伯宗中初言秀秋筑紫上野与善
曾我部土佐大首刑部右继增田右清附尉長盛
長年久花家政平塚因幡与平白部花与平條
中務中下伯宗与平九鬼大隅与平友宰相義統
都合九萬三千七百騎ト仰之ケル

遂後為逐治從軍車馳上村平賴重

一 去程七月廿一日家康公六万九千二百騎ノ御
勢ヲ引率之玉ニ武列陣ヲ打立上野

宇津之近御之東陣之應三石田治部出陣
之成殊近ヲ倉西陣中玉ノ大者小者較ヲツク
雲霞ノ水ノ大坂へ寄集リ諸合詳殺之テ
圍之入討平ノ勢ヲ分ツカワシケル尤丹後國
田邊之城長岡玄音ノ城城ノ小野木繼友也
大将但馬丹後國中ノ軍七千餘騎取掛ケル
城之玄音法印扱ヒスニテ兵糧玉藥以下
山ニテ相戦フトイハトモ毎為滅平死

多ク方未協抱(難ク由十ノ成ヲ逐ガス筑景
ハ大友宰相義統大將軍トシテ馳下リ儀
兵ヲ揚ケル不從ト云者十ノ人質以下取回メテ
リ小國ハ系田肥系等利勝貞列年合ノ夕
メ越系ノ國ハ押カレ下聞ケレハ斗羽上高丸
衛門尉長室山口玄蕃頭加賀國大聖寺
卜小松卜ニツノ故三テコシラ支ヘ伏見ノ故ラハ
筑系中納言秀秋為津兵三津氏義弘増

田右衛門尉長盛長系大統左轉家政先利
一家之人殺三テ一日一夜ノ石三攻テテ故中ニ
松平上丸清門松平至殿強多井彦右清門内
藤原系尉以下志ク切腹ニ由大津ノ故ハ
柳川仍從久留米安田中侍車民部筑上
野介南系中務木下伯中寺堅田兵部増
田作九衛尉石川掃部高田小丸清門時宗
之入々取回メ切寄ルノ間漸至系極幸

次

相高橋難儀ニ及ニ既ニ落城不_レ過旬日之由

ト云_レ伴勢之團ハ安藝大_ニ統_ニ補元_ニ康吉川_ニ仍

安藝相補元

從安國寺長曾我部云_レ依_レ与_レ去_レ未_レ大統_ニ進_ニ而_レテ

富田信濃守_ニ口_ニ始_レ城_ノ野津_ノ城_ハ取_レ掛_レ綱

之_ノ圍_ニ之_レ几_レ城_ニ信濃_与并_ニ國_上野_ノ城_之合

部_九京_岡岡_去城_ノ城_至古_田兵_部少_捕ヨリ

兒_玉仁_兵清_尉ニ_足押_武石_人添_テ馳_加ツ_テ

水_形相_圍ト_トイ_ハト_モ武_了條_之大_軍卷_詰息

ヲ_モ續_ス責_立ラ_シ益_多城_ヲ明_還ス_岡國_松

坂_ノ城_古田_兵部_少捕_構ハ_鎧鴻_信濃_与池_高

ノ_岡兵_部者_ノ城_三氏_家内_膳正_龜山_之

城_六岡_田ヲ_ス入_置兵_濃國_三伯_系中_内

言_未家_石田_沼謀_少捕_之成_押治_リ波_阜

中_初云_未信_部ヲ_相結_ラニ_岡中_ノ士_卒

ヲ_催促_之波_阜ト_大植_ヲ柵_城ニ_テ約

ノ_關ニ_新圍_ヲス_入東_海道_東山_道也

道ヲ指塞シテ西内小玉ノ往來ヲ封爲威勢ヲ
振ニ近國旣ニ入奉ニ乃ク之系車出之軍
ヲ暫ク被指置テ急ニ上ラセ玉ハト方々ヨ
リ櫛ノ齒ヲ引ルニ早飛肺早馬ヲ打テ
関東へ告來ル聞者有鬼ヲヒラス代ハ旣ニ又乱ニ
ナリヌトアマフニヌ人モ十カリケリ中ニ西内
中出ヨリ下向ノ侍ハ兎角ノ分別ノ落着キ
ヘナリケリ雖然大將軍モ敬爲思ノ御業モ十

カリケリ後ハ沛心ヨケニ見ヘサセ玉ノ西葉不
去則心用齊柯會津表へ結城宰相秀康
卿大由トシテ救テ騎被指向家康云々トラセ
玉ノ遂後御還治アルキトテ武州江戶ヨリ
引返シ御馬ヲ及入江城ニテ右卿家膳給リ
諸士ニ向ツテ戦之異見ヲ向玉ヒケル列座ノ
軍士評議品々ナル處ニ徳永或部卿法印壽
臣進カ申ケルハ人將モナリ御二寄合勢ト

ハハトカウ西國大者教ヲ辱之三人が張スル
ハ天下之安危ハ此一舉ニヤラニエ、之キ御本
ナリト存ルナリ但今度又濃國へ逃ルケル
軍士ヲ討リミレニ備京中納言安藝中納言言
中納言此三人同意之國持也汝京中納言
秀信卿ハ雖為小身信長卿之嫡孫ヲテ
鼻高アリ給フヘニ然ラハイツシラ又將トモ不
ツレノト知ラ用ユキトモ不覺互々武威勢

年ニが年セニ一幾程モルニ此何ニ事ハ願ラシ
タリトモ之成ト知ニ廻ルキ者此方ハ十カレニ
アテハ下知ラテス者ヲ猜ミテ御方ニムル
者多カレヘニ縱降糸セストモ猶本心ニ振舞
フヘケレ被此ヲ考ルニトニテ心悪カラス御
晴利ヲ得ラレキキ何疑ヒカアラシ併
敵勢未美濃國ニ足ラ溜サレ先ニ討キノ結
ヲ御ノホセ在テ下知モア候ハト憚ル所ナシ

申一テリ家康聞給に實に下恩に合致之
極に強三勇士ノ心ニ任スキト仰ケ其内福
海に清明を正則申シケル今乃美濃
路之合戦ニ於テ其一方之御先キヲ采
ツテ敵ヲ一膏アテ、見候ワ先子ヲ御
免アシカシト望ミケル家康公誠ニ御心ニ任
シマシケ宜ニ隨ニ今乃軍先キニ成致ラ
福海に清明を正則申シケル今乃軍先キニ成致ラ

源頼朝卿ヨリ依々本ニ磨スミヲ給リ守治
川之先陣ニタリ之佳例ヲ被恩にケルニ
免々之入選ニキ御馬ニ鞆置テ此等ニ
遂後逐治スルキノ肯上意ニテ正則ニ給ハリ
誠ニ今乃本曾川ノ先陣ハ清明を正則ニ
可在トテ上下ノ人トニリ乘タリケル徳永ハ
美濃岡ノ案内者トシテ福海ニ相副軍ヲ勵
スル石碓ニ諸士ニ見立テテ軍中ニ



神也ナリト被作人々之馬ヲ玉ハル目代ニ井
伴兵部少輔直致ト多中務ヲ先トシテ都
合其勢ト萬條新八月朔日ニ武品加戸ヲ去
同十四日ニ尾州ニ至後リ清原邊ニ陣ヲ取
テ人馬之定ラ体メツ美濃國へ責入ヘキトノ
計策事評議區々ナリト之鬼ニ九清朋ト更申
セシハ濃州一由之内ニ敵方ニ持タレ旅々ノ
ケレハ先服旅トモシテ責ナヒケルノ勢ニ頼
ミラモ恩ニキラセ敵々ノ氣ヲ奪ヒ取阜ノ
旅ヲ責落シ十八西國々寄合者トモ十二原
支ラヘキ聞ラテテ逃上ラニ本業ノ由ナリ
ト云ケレハ西月代同心ニテヨキ評議ナリトテ人殺
賦リニタリケレ

濃列福年之故之丸毛之集居旅之事

一 美濃國中々大者小者數ヲ盡シテ國州御
座催從ニ隨ヒ或ハ井中陣ト自道ニテ打取

介の之明日ノトヒニメクマカニモ多カリケル
丸毛之帝兵衛尉モ吉日辰辰ヲ撰ニテノ降ノ
目取ヲ悔入引返之慮ニ石田治部方ヨリ為使
川瀬丸馬也福米駛トツテ秀頼公御代官
トニテ旗ヲ上西國大者引年ニカ張令ノ慮ニ
白旗ヲ取攝へ柁ヲ泊ニ葉ヲ堅クスル謀ヲ
十二西國往還ノ使ヲ留ハ奥州ノ降ノ士卒
心ヲ艱ニ不戦ニテ軍門ニ降奉掌ヲ指カ

此ノスヘニ其方ノ中今度奥州ノ降ノ依ヲ相止
テ味方ニ屬シ軍志ヲ勵スヘニサアラニ終テ
ハ恩賞望ニ任スヘニト演説之ケルニ帝兵衛尉
一社ノ祥返ニ不及ニテ同心ヲナシケル大垣ノ旗兵
將運送ノ使又ハ後詰ノタメトテ別在所福米ニ
在城セリ然慮ニ危列奈目之横井伊織多幸之
私者ナレ故ニニ帝兵衛尉家老之丸毛六兵衛ヲ
呼寄今方ノ不慮ニ凶徒ト同類セラレト云

非

ソカ十三ヶし人間カニ為作り、キマール美
見モ詳送モキニ依ソトニ夕、カニ悪ハニ六、清尉
級ヲ八斗リ、キ十リケシ六何トコニテモ、
詮十キ、キ十リトテ是悲ナリ、シカノ者返
申切、張ニ有八月廿六日、市橋下、徳永
或部、法印、横井、伊織、横井、源右、清剛、尉、同、作、意、
尉、八、福、幸、ノ、東、カ、治、村、弘、法、之、所、へ、池、向、丸、毛、
三、市、兵、清、為、三、洞、之、合、セ、根、煙、ヲ、上、ケ、シ、八、丈、垣、之、成、

之、伊、藤、兵、清、尉、昔、松、ノ、城、之、武、光、式、部、少、輔、
之、成、方、ヨリ、カ、勢、系、野、兵、庫、以、高、野、越、中、也、
武、光、ノ、系、雜、兵、内、居、時、刻、ヲ、不、移、都、合、武、千、
計、リ、三、テ、大、藪、村、又、朽、村、へ、馳、カ、陣、ヲ、張、テ、大、河、
ヲ、隔、對、陣、之、銃、炮、夫、戦、始、ル、ト、云、ト、モ、之、町、條、
ノ、大、河、ヲ、隔、タ、ル、本、十、八、何、之、傍、負、モ、十、リ、具、目、
モ、暮、ツ、互、ニ、睨、ミ、合、テ、陣、取、ケ、ル、然、レ、處、ニ、市、橋、
、總、也、家、之、子、金、毒、手、九、清、剛、竹、内、四、郎、清、剛、

此今近自テ此等ハ地侍ナシハ案ハ能知タル
ヘニ敵勢ノ後廻リ在ルニカシ掛時声
ヲアケヨ川向ク敵勢姓名ヲ聞ニ憂ミキ
敵ハ一人モ十ニ皆公トキ者ノカリ兵十ニ下
知ラモ聞不入サトヨイテ迎シテマ行ニ折角
マ戦ハント度ヲ失フ時墮ト川ヲ乘越タテッ
ク敵ラハ討取近ル者ヲハ掛子ラニ福来ノ城
ハイレモ不立ニ案取ヘキト案之ハ也但し雨

漲

人の謀畧ニ依ヘト申ケレハ一云卷角ニ不ぬ
ニテ領掌ニ水練之上午ヲ晴テ十四ハ右具
ニ十六日夜半時分ニ河上へ押廻リ暗テ流矢
河ヲ本トモヒスヲヨキ越テ敵ノ後十ハ自達
防村掬股村へ忍ヒ入ケレハ家々ノヲ押タテ
タル計リテ百姓中一人モ不残迎テテ雞
犬ヨリ介ニハトカムル者モ十クニテコハカシユト
近リ廻リ思フ極ニ敵火セシメ関ヲ咄ト揚タ

姓

ハシニ下總とある恩慮セシムク大藪村へハ張夕
ル敵方関声ト放火ニ周章騷キ散々裏ノツ
ニテ治部中補ヨリ和勢并 伊直長 桑原光
式部以下 旗指物ヲ物之具ヲ取ステトル物モ
不取敢ニテホラ指テ近所大垣ノ城へ引トリチ
ル丸毛ハ田中ノ細縄半ヲ傳ヒ倒レタタニテ福
車ノ城へ引返シ川向ノ敵勢色々キタ程ヲ
見テ一橋下總も徳永父子が村ノ川ヲ意

越徳永ハ小ノ手へ巡リ敵ニ追スカフテ追廻シ
大声上テ切テ掛リケルニ逃ニリ切レテホラノ逃
ルモリ返シ合セ戦フ者モ十六騎討取追散シ
ケル市橋下總も丸毛の跡ニヒタト有テハ
セニト透るモ十ノ追カクニ福車迄ノ縄半ニ
テ首ニテ大討捕既ニホテハニテ追責ケ
ル丸毛カ家人西原加藤剛尉父子馬ノ手縄
就テ洪右右衛門尉ニ向テ云ケルハ惜敷

予哉敵ニ逢テちロヲモ不抜矢一ツモ放ス事
ナリノ聞ヲシテ引タル事是唯本ニ飛ス今
日ノ合戦ハ此方ノ軍ノ手始ニ如此ナレバ行末
トテモ頼ミスクナシイテ返シ合セ討死シテ丸
同緒年ニ心安ク敵へ引イラセト云程ユツア
三人兵返シ合セ鎗ノ柄ノラレシ居リちカノ
ツカノ碎ケシ程ト寄來ル敵ヲ暫夫テ
戦ヒシカ寄年ハ多勢防クハ唯二人ナレバ其
鉄石ニモ非ス枕ヲナラヘ討死ス誠ニ此者トモ討死
スニハ相入ニセラレ放ラテトラレ汚名ヲ後世ニ
殘スヘキニ帝無湯尉多事恩賞ノ奉ムラソ
蒙リタリケル丸毛家中ノ者トモハ指置タル放
戸逆茂本ニセカレテ敵へ可入橋モナカリケレハ
右往左往ニ近ナラシ敵ニ小勢ナレ故ニ帝無湯
流石ノ勇士ナレトモ抱ヘ難ク々思ヒケシニ支ヘモ
支ヒテ又年ノ門ヲ立置帝家門ヨリ立ガ

鉄石ニモ非ス枕ヲナラヘ討死ス誠ニ此者トモ討死
スニハ相入ニセラレ放ラテトラレ汚名ヲ後世ニ
殘スヘキニ帝無湯尉多事恩賞ノ奉ムラソ
蒙リタリケル丸毛家中ノ者トモハ指置タル放
戸逆茂本ニセカレテ敵へ可入橋モナカリケレハ
右往左往ニ近ナラシ敵ニ小勢ナレ故ニ帝無湯
流石ノ勇士ナレトモ抱ヘ難ク々思ヒケシニ支ヘモ
支ヒテ又年ノ門ヲ立置帝家門ヨリ立ガ

川面へ打越え大垣へ入又備え城ヲ八十總
入替りし

同國宮領ノ城至高市十市備前尉近敬

一 福海在備前正別濃州西方打廻りトシテ僅ニ
百騎計リニテ尾列清須ヨリ打方市橋ト
總舟在所西美濃今尾之町入ト東陣ニテ今
美濃路へ池方陣ヲ張タル敵方之強弱ヲ
聞合セ軍評ヲ定メ先手本力長城を以テ之

宮

城ヲ計策ヲ廻シテトルニカキトハ云ナカラ
唯是敵ノ氣ヲ奪フヘキ端ナリト徳永法印
ニ密語アリテハ法永領當キニテ家僕ノ布
衣市丸備前尉并一白系者ノ坊主加納村之
寶貞寺坊ヲ竊ニ官須ノ城へ遣之甲ヲ略テ
降参之城ヲ明海ニ可然之旨云遣之今ハ
原隠成也右田之中治ノ仁ニ在陣ニテ在集
皇ノ申合後見在攻請又寸一ノ返奉ラ

テハ三倍ニ又越方行水ノ事近河結ヒ起ラカ
ヘ様ヲカヘテ其實ヲ盡シタル群ニ申遣ヒテ
ル高木十郎丸清門ハ其器量人ニ勝レテ二相
ヲ寸トシ勇キナリシカトモ老武士ノ法不ニ
ノハニ夕カウシテ進平馬ノ目ヨリ押寄雙
方ノ鉄炮玉ナニナカシ折相戦フ由ラニテ寸
ツト引故其後福清ヨリノ加勢ヲ相具ニ推勢
ニテ進平へ攻寄候へ其時搦平西之木戸ヨリ

外

の邊可申ト隱密ノ申合セニテ八月十九日徳
永又子一橋下總古橋井伴藏同源右清洲尉
同依在清洲尉并福清加勢之ノ人取都合其勢
二百餘騎ニテ馬ノ目ヨリ押寄ル宮本ハ多ニ密
契ノ如ク西之橋戸ハ明邊へ之ヲアラハ福因純
平ノ難不掛ラシタル時嚙ト進巧テ討捕ヘキ
物ヲト法不其ノ計リ之心中ニ謀リテ加勢
也、家中之去年ニ隱謀由結ラハ申之聞

法印カ魔波軍軍セヨト計リ軍法ヲ云編ケ
此後テ卑リ雄ノ若武者トモ人ヨリ先ニ鬼入
ト又ケ掛ニテ成田村ヨリ搦手ト押廻リ横井
依テ清門尉并徳永亦從川村忠右清門主先ニ
蒐入俣鬼ニ塚中ニ者共流石ヲ断セサリケ
リ高本之勢老ノ川瀬平テ清門尉並忠
右清門尉ト鎗ヲ合レ川瀬ヲ突テ首捕
テ引返ク之次ニ徳永依右清門ト名寄テ掛

杖
イリ寺倉源テ清門ト海ニ合セ源信門ハ二間柄ノ
鎗依右清門ハ八尺柄ニテ互ニツマキイ
タリ秘術ヲツクニ時移レ程ノ戦ニ致ニ見揚キ
ナリ横合ヲ柄ニ不定ホトノ獲キ小路ニ有ハ

高敷ノキニニテ跡へ廻ラトスモ不付後陣
ノ者心ハ鬼ニ進メトモスヘキ構ナクニテ敵味方
アレハ々ト計リ將クナリハ守リケリ大身ニ
重ニククヒシマニナリケニ終ニ源信源平ヲ負

引返り然るに帝命を請ふ人聯方ト云徳
永法不ニキ又キニ達云念之キナリ必何ニカタ
ニ法不之私法ニシタフウカサレテ生捕ニセ
ラレニハ情ト恩ハスマアマニナ浅スナ者トモ
目ノ塵拂ツテ飛ガニ戦ヒケルニキ未矣此ハ
ヨシ城申ヨリ射ガスガ銃炮空矢ハ一ツモナ
徳永家鞍川村不右清洲ニノ丸へ責入ケル
ヲ銃炮ニテ射スウメテ城門へ首ヲトシ徳永

家老徳永掃部モ銃炮ニテ折倒サレシカタメニ
實ラ著タリニ故ニ身ハ恙ナカリケリ福永家
勢ノ内モ銃炮ニ折シ矢ニ當リテ矢ニ死スル者
リ死生ノ境ニラサレモ多カリケル角テ福永此
趣ヲ聞ツケテ大キキ業ノ小キキ業ニ較ラソユ
ナニ申スキ偏ニ法印カ所為ナリトテ自リキ
軍ニ引トレト類并ノ後ニテ高須ノ城ノ圍ミヲト
シ引返ク言キナ高須ノ城ノ圍ミヲト

一 寄云ヶん此城於テ又敵ヲ討請後詰リ
頼之モナリ討死シテモ何カセシ幸ニ敵モシタリ
一 先當城ヲ取逐ニ此死辱ラハ後日ノ衡ヒテ
キヨムヘシト云モ教タ久福岡纏平ニ指掛リ約
ノ依リ之舟ニ棹寸シテ山平ノ方ヘ逐ツキタ
リヶん其邊ノ在々ノ小舟トモヲ切流シテ
ソノキヒケル

同 尾州大山麓城之軍士降シ示候事

玄程云山ノ城ガ東山道ヲ寸シカ、リ東海道
ヘモ便アリ岐阜ノ枝城ニシテ要之所也爰ヲ以テ
一 三指ヨト中約云秀信郷卜治部女捕ニ成遊詳
終大山之城之石河内等ヲ加勢濃列黑野城
至カ者依右清洲尉田岩中ノ城之竹中村後
守同軍上之城之福葉右京亮同長六任勢
関長門守又坂ヲ鉄炮ノ組トモニ都合七千
一 此條指懸リテ長タリヶん併リヶん處ニ

下後ちた後尉向テ竊ニ語リケル今者
西國ノ大者不致が張スルト云トモ此比之興
夕ラクヲ見ルニ我カ者ニ威勢ヲ争フナリ
緒キ者威ヲフルイ想ルマカラ計リナリ
右今之軍用品、アリト云比奇正履食ノ
外ニ不奇奇心虚実ハ勝負ノニツナリ
勝負負クニハ大將ノ心中ヨリお就ルハ陣ヲ
心ニ備ヘテ威ヲ敵軍ニ振フナリ奇智仁義

ノ器用アリテ大將之軍ニアリ人一人トシテ
十ヶ六何シラ又トモ何ク下志ニ随フヘキト
モ不寛面、救ノ軍立ニテ一戦之約ニ及ヒ
十八軍敗ルヘキ事ハ疑ヒナシ唯今世之變化大
乱ニナリヌルニ付テカシカヘルニ智仁勇ノニツ
ラ着玉ト其徳廣博ニテ云カノニ返ル天下ニ
外ハ名ハキハ家康トモイサマ 今年ニケセ 謀リ
二下兩人ウナリ相テ使ニ命等ヲ関東軍下

一ノ述々リテ其奥列御陳節之依テ而一軍
用意ニテ既ニ今日ノ明日ノト云觸レ不ニ其
中納言秀信卿ヨリ秀乃頼公ノ催促ニ付セテ
義兵ヲ揚ルニ糸奥州お勢之依テ相止當キ
ノ軍法ヲ以軍忠ヲ勵ニスヘキ也若違北軍ノ
族ニ其籠ヘ込向テ一戦ヲ遂ヘキノ者權柄ノ使
殺度ニ力ヲ僅ノ要害ト云指ツキ申スヘキ
ホトノ年勢モ十ヶ年ニ事急ニ非ストモ不
及

非

之愆ニテ不慮ニ殺進ノ事堂ニ早然リト云トモ
内心ニ全無違之儀ナシ家康公當地戰陳ニ
節ハ必味方ニ示軍忠公ケニスヘキ十六初メテ
若キニ可成キ事モ候フニト委細口上ニ申
フソメテ使節シ関集ヘ下ス處ニ之州若田
三ノ兩目外本田中務井伊兵部三所達テ方
三ノ趣申述ケレハ兩目外今乃お勢ノ者家
一トテ長悦ニ家康公ノ不心ヤスク恩石後入

帰

トトリナシ申す此比ノ懸ニ至ルナリ忠告ノ
至リ此類ナキ者申入ル西人ノ使をヨリ均リ候
ヘト念比ナシ返キナリシカハ急キ弛向リテ失
者角ト申ケルが故竹中一ノ聞テ長松ノ眉
ヲ合ミヒソメキケレハアナカシ工限ヌト云トモ天
地ニナシハ倍ヘシモヒソメキケレハ有人能合シテ猶
葉関ノ殿原ニモ後リ進メヌレハ是モ又誘引水
アラハト思ヒラモウ折カラナリイトムニ氣モナリ

同心ニテケリ然リトイハレ故主伯系与ニモ深ク意
密セリ也此ナシハ美濃國中ノ敵城或ハ降キ
或ハ内ニ逐テ漸ク攻阜ト又垣ト有テ計リ
ナリニケリ敵方ニ城トテハ分ニナカリケレハ
先岐阜ヘトリ掛責ヲトセトテ張軍勢八月
七月ニ虎列藩頂ヲ打立美濃路ノ戦場ニ赴
キケル





